

風精霊と異国の格闘技

cafegjean

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女達が出会い物語が始まる

目次

始まりの風

1

知る風

7

始まりの風

「ぐはっ」

どきりと、大柄な男が倒れる

「ひっ!!」

一人の男が、逃げる

「はっ! その程度か」

フードを被った小柄な少女がつぶやく、睡をはき少女は路地裏をあとにする。

いつから、だったか……こんなことをし始めたのは、最初は親たちにイライラしたから、だった……

私の名前は、梅澤 愛香（うめざわ まなか）このミッドチルダでは珍しい、地球の名前だ。母親からはこの名前に合わせるべきだ、と言われたが私はこの名字も名前も好きだから変えなかった。

こうやって、強い奴と戦ってるのは初はストレスの発散が目的だったが、次第に自身を鍛えるためになっていた。時空管理局とか言うところから、親のところに連絡がいつてるらしいが知ったことではない。

夕暮れの中、私は家に帰るために公園を通り、その時だった。視界の端に綺麗な長い黒髪の少女がはいった。いつもならスルーしてはいるはずなのに今日は違った。直感した彼女は、強い。私と同じ年くらいに見えるが、空気が全くない。気がついたら私は少女に釘付けだった。

「うん？」

視線に気づいたのか少女が振り返る。透き通ったコバルトブルーの瞳が私を凝視する。

「何か？ ついてるかしら？」

「いや、あの、そうじゃなくて、強そうな人だなんて、みとれてて」

「いやいや何を言ってるんだ！ 私は、初対面の人に強そうな人だなんて、馬鹿か！

かなりテンパっている私を見て、ふふつと少女が笑い出す。

「ああ、ごめんなさい、つい、初対面なのに強そうな人だなんてってふふ……ふふ、ふ」

ああ、今すぐにここを立ち去りたい。

何も言わずに立ち去ろうとすると、少女に呼び止められた。

「あ！ 待ってくださいいな、お名前をうかがっても？」

「……………梅澤 愛香」

「愛香ちゃんふむふむ」

少女は、手を顎にあててうんうんと頷いている。

「えっと……………」

「うん？ どうしたのかしら？ あ！ わかった！ 私の名前ね！ そうよね。聞いて

いて名乗らないのは、失礼よね！」

手をぼん！ と、叩き名前を名乗りだす。

「私の名前は、データー・シユタイベルトって言うわよろしくね、愛香ちゃん！」

「あ、うん、よろしく」

「ところで、なんで？ 強い人を探してるの？」

データーと名乗った少女が首を傾げて聞いてきた。

「なんで、だっけな……………ただ強い人と戦いたいただけなんだ……………」

「ふう〜ん」

データーは私のことをじっと見つめてから、喋りだした。

「じゃあ！ 戦おっか！」

「え?」

突然のことに、すつとんきよんな声が出てくる。

「なんで?」

「なんでって、強い人と戦いたいんでしょ?」

ディータは、キョトンと首を傾げる。

「いいの?」

「いいよー! あ、全力できてね! 愛香ちゃん!!」

全力! いいのか?! いや、全力でいくけど……構えてないんだよな、いいのかほんとは?。

戸惑いながらも、構えを取る。愛香が使う武術、天仁拳は、体の動きを最適化して、打撃を与える武術であり愛香は速い打撃と手刀を持ち味とすべく鍛錬を続けており。地球では、かなりの実力がある。構えを取らないディータに対して愛香は、利き足と利き手を前に出す構えをとっていた。

構えを取ってないけど……、一気に攻める!。

すつと利き足が前にでる。するとかなりのスピードでディータに近づく。

この距離でも、構えないのか!?

データーが、構えないことに困惑しながらもかなりのスピードで右ストレートを顔めがけて打つはずだったが、気づいたら数メートル自身が吹き飛ばされていた。

「え？」

理解が追いついていない。確かに私は、打撃を入れるためにデーターの前までいったはずなのに。

この疑問は直ぐにはらされた。データーの方に目をやると、右手が拳を作り前に出されていた。打撃を食らって数メートル飛ばされたのだ。しかし、ありえるのか構えていない状態からこんなにも早くて強い打撃を繰り出すことが。

知りたい！私の中で響く、最も、データーの事が知りたい！

その響きがどんどん強くなっていく。

「ふふ……、いい笑顔じゃない！愛香ちゃん！ねえ、愛香ちゃんうん、愛香！貴方は、他にどんなことができるの？見せて私に！そうしたら、私のも見せてあげる！」

笑顔のデーターが叫ぶ、笑顔の愛香が叫ぶお互いの名前をまるでお互いの技を褒め合うように、認め合うように。二人の拳がぶつかり合うお互いを確かめ合うように、お互い会えたことを喜ぶように。気がつけばあたりは真っ暗になっていた。

「はあはあ、すごい愛香」

「はあはあ、データーだっすごいよ」

ヨタヨタつと愛香が倒れそうになったところをデータータが支えた。

「はは、もうこんな時間だし私の家近いから愛香今日は、私の家にお泊りね!」

「え? 待って、家の人に心配されるから!」

「大丈夫、大丈夫私の家から電話すれば」

「ええ〜!」

こうして私は、データータの家に連れていかれた。今思えばここでデータータに会った時からこうなる事が、決まっていたのかもしれない、私が異国の風精霊（フォーイン・シルフィード）と呼ばれるようになりデータータとストライクアーツで高め合うようになることが。

そう、ここから始まったんだ私達の物語が

知る風

「はあ」

なんで、私は知り合ったばかりの子の家でその子と一緒に風呂に入っていて、身体を洗ってもらってるんだ？

そんなことを、思いながらディータに身体を洗われている。

「愛香？ 痒いところある？」

「ないよ」

「わかった〜」

タメ口だし、呼び捨てだし、なんなんだ？

困惑しながら、身体を洗われていると不意に声をかけられる。

「愛香って何歳なの？」

「え？ ー11だけど」

「まあ！ 同い年だ！」

まじかよ！ 思わず声に出そうになった。なんとなくそうではないかと思っていた

が……

嬉しそうに、鼻歌を歌いながら泡を流していく。

「ひあつ！ 流すなら言え！」

「あつ！ ごめんなさい、忘れてた！」

なんなんだ！ 本当に！

少しイライラしていると、ディーターが話しかけてきた。

「愛香、頼みがあるのだけど……」

「なんだよ」

「身体を洗ってほしいの、ダメ？」

え？ 何言ってるの、この子？ 今日知り合ったばかりだよ？ そんな子に自分の身体を洗ってほしいの?? まあ、私も拒否できなくて洗ってもらったけど……

「はあく、いいよ」

「ありがと、これ使ってね」

と、ディーターが洗うものを渡してくる。渡されたものを持ちゆつくりと身体を洗っていく。

「終わったよ」

「ありがと」

泡を流し、お風呂をでる。その後ご飯をごちそうになり、何故かディータと同じ布団で眠った。

【翌日】

目が覚める、見知らぬ部屋で少し困惑するがすぐにディータの部屋で一緒に寝たことを思い出した。横を見ると、気持ちよさそうにディータが寝ていた。

「そつうだった……」

起きようとした瞬間、アラームがなる。そのアラームでディータがきる。

「おはよう」

「うん、おはよう」

手を、掴み洗面台に連れていかれる。

「これ使つてね」

歯ブラシを渡される。歯を磨き、顔を洗う。昨日着ていた服を着て、朝食をごちそうになる。家に帰ろうとする時にディータに声をかけらてた。

「愛香、このあと暇？」

「うん、暇だね」

「じゃあ、ついてきて」

腕を掴まれ、連れて行かれる。しばらく歩くとスポーツジムについた。

「スポーツジム？」

「うん！ 行こう！」

スポーツジムの中に連れて行かれる。

「おお！ 来たか、ディータ」

「オッス！ コーチ」

ガタイのいい男性の前でディータが挨拶をする。長身で短髪、優しそうな顔をしている。

「うん？ その子は？」

「私の友達です！ 見学で連れてきました！」

「うん？ 見学？ なんことだ？」

不思議そうな顔をしている愛香を、置き去りにして早歩きでディータは、どこかにいく。

「コーチ着替えてきます！」

「おう、でお名前は？ お嬢さん」

「愛香です」

名前を言つて軽く会釈をする。

「そうか、まあそこに座つててくれ」

「はい」

パイプ椅子に座る。しばらくすると、ジャージ姿のディータともう一人女の子が歩つてきた。

「おまたせしました！」

「よし、ストレッチしたら模擬試合するぞ」

二人が、返事をしてストレッチを始める。その様子を見て一人の男性が話しかけてきた。

「あら、こんにちは、」

「こんにちは」

振り向くと、女装をしたガタイのいい男性がいた。

え？ 男？ いや、女物の服着てるし、うん？

少し困惑していると、男性が続けざまに話しかけてきた。

「あなた、お名前は？」

「愛香です……………」

名前を聞くと男性が、激しい動きをしながら話す

「んん、愛香ちゃん！ いい名前ね！ それで、ここには何用かしら？」

「ディータに連れてこられて……………」

「なるほど、ディータちゃんのお気に入りなのね」

うんうん、と頷いたあとにさらに質問される。

「愛香ちゃんは、格闘技ってやっていて？」

「はい、います」

「そうなの！ なうつら、今から見るのもきつくと興奮するもののはずよ」

見るもの？ なんだらうか？

期待と不安を胸にディータ達の方を向いた。

ここで、私は始めて見たんだDSAを……………」